

經濟論叢

第七十五卷 第六號

- 流民續考……………穗積文雄…(1)
- 新中國における工商業の調整について……………三木毅…(16)
- フランスにおける初期マルクス研究の動向……………吉田静一…(34)
- エム・ラヴェリチエンコ
「資本主義諸國における農民の貧困な状態」
- オーグレスメット
「植民地、從屬諸國における農業の衰退」……………富岡裕…(44)
- 資本蓄積……………モーリス・ドップ…(50)
-

〔昭和三十年六月〕

京都大學經濟學會

フランスにおける初期マルクス研究の動向

吉田 静一

いわゆる「原始マルクス主義」が、マルクスの初期の勞作をかれの全體系から切り離し、そこに超階級的・人間主義的體系を假構して、成熟したマルクス體系（『資本論』體系）を「俗流化」せしめるものであることについては周知のところである。論者が論理展開にさいしてすえる中軸は、なによりも、《自己疎外》概念であり、それが展開されている初期マルクスにマルクス主義の最も正確な表現を見出しつつ、マルクスがブルジョア社會の解剖の基底として把握した《經濟學》を、俗流マルクス主義の所産として規定する。かかる論者の典型として、たとえばカール・レヴィットをみよ。「《唯物史觀》は、その内容からいつても、表現からいつても、マルクス自身、殊に《哲學的良心》をまだ清算していなかつた若きマルクスには見出されないものである。その唯物史觀は、エンゲルス及び後期マルクスによつて準備された經濟的俗流マルクス主義の所産である。これによつてブルジョア經濟社會の人間に對するマルクスの批判的分析の本來の完全な内容は、かなり失われた。」¹⁾ここで展開されているすぐれた人間主義的視點、それは必然的にマルクス主義を「哲學的人間學」にすりかえ、階級的見地は人間主義によつて隠蔽され、それに解消される。こうしたいわば「俗流」マルクス解釋の傾向は、ただたんにレヴィットにとどまらず、

國際的規模で展開されている。フランスもその例外ではない。

一

ところで、フランスのマルクス主義者E・ポッティヂェリは、こうした傾向に對して總體的批判をこころみてゐる。ここぞ紹介しようとする、『パンセ』誌五一號所載の報告、「マルクスの初期の著作について」がそれである。²⁾この報告で、ポッティヂェリは、上述の傾向を三つの局面に分けてゐる。その第一の局面は、マルクスをヘーゲルの最もすぐれた弟子にしたてあげ、かれの思想をヘーゲル哲學の實のり豊かな延長として規定しつつ、マルクスをヘーゲルに矮小化せんとする傾向（したがつてマルクスにおける精神の優位性と形而上學との強調）。かくてそれは必然的に、未だなおヘーゲリアンであつた若きマルクスこそが眞の思想家であり、「資本論」のマルクスは政治家にはかならない、という歸結に達する。マルクス歪曲化の第二のところみは、マルクス主義の中軸に道德觀念をすえおき、マルクスを階級闘争ぬきのモラリストにしたてあげる傾向。そこでは、マルクスの思想における理想的人間像が強調され、プロレタリアートの階級闘争は、ヨリ高められた人間性のための意識變革にすりかえられる。（「プロレタリアートの武装解除」）。第三の局面は、經濟學者によつて切りひらかれ、マルクス經濟學理解の鍵を哲學思想にもとめる過程で現れる。たとえばビゴ³⁾。かれは、若きマルクスの思想と『資本論』との連繫を探究しつつ、「マルクスは生涯ヘーゲリアンにとどまつた」という結論に到達したのである。その意圖は明らかに、後期マルクスの勞作をたんにヘーゲル主義の延長とし、マルクスをヘーゲリアンに矮小化するところにある。

これら俗流マルクス解釋學が、マルクス主義をいかに非科學的にしか把握してゐないかは明らかである。しかし

われわれにとつての當面の課題は、若きマルクスが傳統的哲學の諸範疇を使用した、その眞の意味を把握することであり、マルクスの抽象化、一般化の科學的方法と、觀念論者特有の概念の遊戲との本質的相異を認識することになければならない。

ここに例を「疎外された労働」にとつてみよう。マルクスは『手稿』において次のように規定している――

「労働の外在化はどんなところにあるか？ 第一に、労働は労働者にたいして外的である。すなわち、それは彼の本質にぞくしていいない。それだから労働者は、彼の労働において自分を肯定しないで否定する。幸福をではなくて不幸を感じる。自由は肉體的・精神的エネルギーを發展させることなく、かえつて彼の肉體を辛苦させ彼の精神を荒廢させる。だから労働者は、労働の外部ではじめて自己のもとにあると感じ、労働のなかでは自己のそとにあると感じる。労働していいないとき彼は安樂であり、労働しているとき彼は安樂でない。だから彼の労働は、自發的ではなくてしいられたものであり、強制労働である。それだから労働は、欲求の充足ではなくて、労働以外の欲求を充足するためのただの手段にすぎない。……最後に、労働者にとつての労働の外在性は、労働が彼自身のものでなくて他人のものであり、労働が彼にぞくせず、労働において彼は自分自身ではなく他人にぞくする、ということにあらわれる。」

ここで先づ注意せよ、この引用文は具體的概念――疎外された労働の分析であり、この分析は抽象的ではなく、現實の人間――労働者――近代的プロレタリアに沿つてなされている。ところでヘーゲルにあつては、疎外の範疇は抽象的概念として現れ、自らの體系の觀念的構造に基礎づけられているのである。（ブルジョア社會の分析から歸結されたマルクスの疎外範疇と對比せよ）。しかもヨリ重要なことは、マルクスが同じ時期にすでに資本主義體

制の矛盾——社會主義體制への移行を認識し（『ドイツ・イデオロギー』）、疎外の揚棄、強制労働の廢止をも打ち出していることである。つまり、マルクスにあつては、疎外の範疇は絶対的・永久的範疇の性格を失つていたのである。疎外は、特定の社會状態に結びつけられた現象にはかならず、この状態の揚棄とともに揚棄される。こうした意味で疎外という抽象概念を示しているとき、マルクスをヘーゲリアンと言いうるであらうか？

しかし、ひとは言うかもしれない、マルクスが階級社會における人間の状態を疎外状態として認識するにいたつたのは、すぐれて人間の概念、人間の本質にかかわるものである、と。したがつて、マルクスには人間の形而上學があり、道徳があるのだ、と。しかし、マルクスが疎外という言葉を使用したと同じ時期に、かれがいかにフォイエールバツハ、ブルノー・パウエル、シュティルナー——かれらは現實的人間に代えるに人間の抽象的範疇をもつてしている——を批判しているかを想起する必要があろう。まさにマルクスの人間主義の基礎は、歴史的に規定された現實的人間だつたのである。言いかえれば、人間の唯物論的概念は、社會の科學的分析から歸結され、それに基礎づけられていたのである。たしかに、『手稿』の時期におけるマルクスの思想には後にみられる緻密化された科學的基礎がまだ與えられてはいない。しかしそれにしても、かれが哲學からえた概念は、近代の歪曲解釋學者がかれに歸せしめている概念とは本質的に異つていたのである。

かくして、歪曲解釋學者は、人間のマルクスの概念を形而上學的・道徳學的想像にしたてあげつつ、若きマルクスの思想をも理論的に破産せしめるにいたる。『手稿』に抽象的ヘーゲル主義からの訣別、現實の科學的認識を基礎として構築された哲學の確立、史的唯物論への移行を認めず、マルクスをヘーゲルのエビゴーンに矮小化せしめるのである。

二

ポッティヂェリの以上の報告は、マルクスの思想的展開に沿つたマルクス研究というよりも、初期マルクス研究をめぐる俗流マルクス解釋に對しての總體的批判であり、それを通じての初期マルクス研究の視點設定にはかならない。

ところで、こうしたポッティヂェリとともに、フランスの初期マルクス研究が、マルクスの思想の發生史的研究——マルクスの追思惟に向けられていることにも注意されなければならない。ごく最近のものでは、A・コルニエの「カール・マルクスの初期の著作」がそれである。ここでのコルニエの關心は、ヘーゲル主義——青年ヘーゲル派からの脱却、それが『經濟學・哲學手稿』に結實するにいたる、いわばマルクス思想の形成過程としての一八四〇——四四年に向けられている。

周知のように、神聖同盟のもとにおいて形成されたヘーゲル體系は、絶對理念の決定的表現としてのプロシヤ國家に絶對的性格を賦與するものであつた。ところで、こうしたヘーゲル體系は、一八三〇年代の急速な政治的・經濟的發展（『ブルジョアジーの上昇』）にもなつて、現實的に破産するに到る。そして情勢のこの急激的轉回は、ドイツにおける自由主義運動を好轉させ、ヘーゲル學派のなから青年ヘーゲル派を生むに到つた。かれらは、ヘーゲルを拒みつつ、歴史の辨證法的・革命的概念を對置したのである。しかしかれらの運動は、すでにプロレタリアートの脅威にさらされて半ば保守的傾向にはしつたドイツ・ブルジョアジーのために、現實的支柱を失ひ、本質的にイデオロギイ的性格をとらざるをえなかつた。つまり、直接的政治行動に無力であつた青年ヘーゲル派は、

現實の非合理的要素の絶えざる批判による歴史發展に眼を向けたのである（具體的に、發展の主要な障害としてのキリスト教・プロシヤ國家批判）。

マルクスは、エンゲルスとともにこの運動の最も熱心な推進者であり、かれらの自由で觀念的な概念を分ちもつてはいたが、しかしすでに本質的な點でかれらと袂を分つていた。すなわち、マルクスはすでに、たんなる自由なブルジョアの傾向にではなくて、民主的^{デモクラチック}な傾向に視點をすえており、したがつて主要關心は、自由主義的ブルジョアの利害のための鬭争にではなく、民主主義^{デモクラシー}、全人民の實質的解放のための鬭争に向けられていたのである。（政治的・社會的情勢の理論的變革^{テオレチカル・チェンジ}、青年ヘーゲル派と情勢の實質的變革^{ソシアリティー・チェンジ}、マルクスとの對比）。このことこそが、抽象的表現にもかかわらず初期マルクスの基底的性格でなければならぬ。

思想と存在、人間と外的世界という本質的問題に關するヘーゲル主義、青年ヘーゲル派の批判哲學に對する批判的態度は、學位論文『デモクリトウスおよびエピクロスの自然哲學の差異』においてすでにとられている。マルクスはそこで、歴史的發展の契機を精神と具體的現實、人間と外的世界との不斷の對立にもとめる青年ヘーゲル派を却け、ヘーゲル的に内在的辯證法にもとめる。しかし存在の本質を精神に還元し、發展の契機を精神に歸せしめたヘーゲルとも異り、マルクスは精神と外的世界との絶えざる相互浸透、相互作用のなかに發展をもとめている。すなわち、合理的世界と精神との統一による具體的總體の形成——發展過程における世界の合理性の喪失——精神の世界からの分離、意志の形體での對立——↓↓象的總體への移行……變革……世界の合理性の回復とともにそれと精神との統合による具體的總體への復歸。歴史發展のこの新しい概念は、批判哲學と同時に、ヘーゲルの反動的政治體系を破砕するものであつた。

一八四二年、ベルリンからケルンへの移轉は、青年ヘーゲル派との訣別を決定的にした。彈壓の恐怖によつて政治闘争から次第に後退し、個人主義と無政府主義とに傾斜していつた青年ヘーゲル派に反し、マルクスは、絶えざる政治闘争のなかから、本質的問題は、もはや宗教問題、政治問題ではなくて、社會問題にはかならず、この問題の解決はたんなる法的・政治的プランに基いてではなく、社會と國家の根本的變革によつてのみ解決しうる、という結論に到達したのである（『森林盜伐法にかんする討論』『モーゼル河畔の癩』）。さらに、『ライン新聞』の禁止（一八四三年一月）によつて、マルクスは、ヘーゲルのいわゆる理性の體化としての國家が理性的性格を喪失し、したがつて歴史發展の本質的役割を演じえないことをみたのである。このことは、ヘーゲル國家論の修正に歸結した。（この歸結が、フランス社會主義のドイツにおける伸展、フォイエルバッハによる宗教・觀念論批判の影響のもとになされたことにも併せて注意せよ）。それは、ヘーゲル法哲學の「批判的修正」の企圖としてあらわれ、『ヘーゲル國法論批判』にまとめられた。ここでマルクスは、フォイエルバッハ的、決定的要素は國家ではなくて社會であり、國家は絶對的性格をもつところか、社會によつて決定されることを明らかにしたのである。つまり、近代的型態での國家、社會と區別され、對立している政治國家は、その形成と本質的特徴とにおいてブルジョア社會によつて規定されること、ブルジョア社會のもとの人間は、個人主義的・利己主義的現實生活を營み、政治社會においては幻想的形態で集團生活を營むこと、そして、この社會と國家との對立、および二重存在は、ブルジョア社會と政治國家の變革によつてのみ廢絶しうることを明らかにしたのである。みられる通りこのヘーゲル法哲學批判では、マルクスは未だ共產主義に到達しておらず、急進民主主義の概念に到達したにすぎない。しかしこの批判によつて、マルクスが、ヘーゲルの影響から自らを解放し、國家および國家と社會との關係についての新たな概念に

到達したこと、理論的には、さきの相互作用の概念が、歴史の理性的發展の決定的要素としての精神と外的世界との相互作用の形態から、社會と國家との關係の形態に移行し、この關係の變革の目的も、理性、自由の理想としてではなく、政治的・社會的生活の新たな様式の實現とされたことに注意しなければならない。

急進民主主義から共產主義への移行は、『獨佛年誌』(一八四四年、パリ)の二論文——『ユダヤ人問題』と『ヘーゲル法哲學批判序説』において果される。この移行にさいしてマルクスは、フォイエルバッハ的疎外概念との疎外の揚棄——人間の全體の解放實現のための——の必然性とから出發した。しかし注意せよ、マルクスは、諸概念の中軸に疎外概念をすえながら、フォイエルバッハの感性的ヒューマニズムを拒け、疎外の宗教的ではなく、社會的な性格を、その揚棄の諸條件と様式とを明らかにしようとするのである。

たとえば『ユダヤ人問題』においてマルクスは、政治國家とブルジョア社會との對立から出發し、この兩者の基底には私有財産がひそんでいることを示したのである。この歸結は當然、私有財産の廢止——社會の變革(急進民主主義からの脱皮)による、人間の全體の實質的解放——疎外の問題にみちびく。ここではじめて、「人間の解放」の擔い手としてのプロレタリアートが登場するのである。それが端的に取り扱われたのは、『ヘーゲル法哲學批判序説』においてである。そこでマルクスは、さらに、プロレタリアートの階級闘争の實踐的目的、社會革命によつて實現されるべきものとしての共產主義を明確にしたのである。とはいえ、ここでのマルクスの共產主義は、經濟的・社會的視點からのそれよりも、哲學的・政治的視點からのそれであり、プロレタリアート、階級闘争と共に共產主義のヨリ正確な概念は、ブルジョア社會の基礎——資本生産の緻密な分析にまたねばならなかつた。一八四四年の『經濟學・哲學手稿』は、その分析の端緒たつたのである。

以上。フランスにおける初期マルクス研究の動向を探るために、ここで紹介した二論文は、ポツティヂェリの報告が俗流マルクス解釋に對する總體的——その意味では外がわかからの——批判であるとすれば、コルニエの論文は、むしろマルクスの思想の發生史的・內在的研究であると云へるが、何れにしても、スケッチの域を出ていない。ポツティヂェリの報告はさておき、コルニエの論文の意圖は、マルクスの思想の形成過程、それを、しかも『手稿』にいたる一八四〇年から一八四四年にいたる時期に限定しつつ、マルクスのヘーゲル・フォイエルバッハ批判・擷取過程を、當時の政治的・社會的諸條件との對應關係に即して、展開することにあつたと云える。しかしそのころは、素描の域を出ることができなかつた。そのために、マルクスの思想の形成・展開過程を、マルクスの問題意識およびその展開にもとめるよりも、それを政治的・社會的さらに思想的狀況によつて説明したにとどまつた。しかし初期マルクスの研究は、言葉の眞に正しい意味での追思惟・追體驗でなければならぬ。ただ、コルニエの論文から得られる示唆は、方法的には、從來の初期マルクス研究が主として『手稿』を手がかりとして展開されていたのに反し、『手稿』にいたる時期を問題として扱つたことであり、理論的には、マルクスがすでにその『學位論文』のなかで、ヘーゲル體系の批判を含み、ヘーゲルをのりこえていることを指摘している點である。ともあれ、コルニエによる初期マルクス研究は、むしろ『手稿』を中心とした今後の展開にまたれるであろう。⁵⁵⁾

(1) カール・レヴィット「ウェーバーとマルクス」柴田・脇・安藤共譯、一一五頁。

(2) “Sur les premiers écrits de Marx” par Emile Bottegai, *Œuvres de Marx*, N° 51, pp. 65-71. かね『パンヤ』誌のこの號は、マルクスの死後七十年を記念してひらかれた討論會を基にした、「マルクスとマルクス主義」特集號である。ポツティヂェリの報告は、その討論會の席上なされたものである。

- (3) Pierre Bgo: *Marxisme et Humanisme, Introduction a l'oeuvre economique de Karl Marx*, 1953.
- (4) マルクス『経済學と哲學とにかんする手稿』大月書店版マルクス・エンゲルス選集補卷四、三〇三頁。
- (5) "Les oeuvres de jeunesse de Karl Marx (1840-1844)" par A. Cornu, 《*La Pensée*》N° 54, pp. 66-74.
- (6) コルニユは、すなわち Karl Marx, *l'homme et l'oeuvre* 1934, Karl Marx et la pensée moderne, 1937 の二書があり（後者は一九五〇年に獨譯されている）、ルフェーヴルによつて賞讃をうけてはいるが、紹介した論文同様、一八四四年にいたる時期の研究である。なお、同論文の末尾で、コルニユは、一八四四年以後の研究の展開を約束している。

執筆者紹介

穂積文雄	京都大學教授
三木 毅	室蘭工業大學助教授
吉田 靜一	京都大學人文科學研究所助手
富岡 裕	大阪府立商工經濟研究所勤務
モーリス・ドップ	ケンブリッジ大學ツリニティーカレッジ 講師